

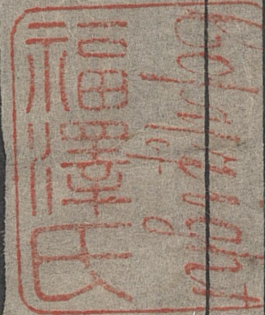
福澤諭吉著

西洋旅案内

附錄萬國商法

尚古堂發兌

慶應三年
丁卯初冬



西洋旅案内

上

福澤諭吉著

西洋旅案内

附録萬國商法

慶應三年
丁卯初冬

尚古堂發兌

西洋旅案内序

論語に朋遠方より来るを安んず悦ばしめんと
やと國の遠方より来るを悦ばしめんと
何るべし唯人の來ふを悦ばしめんと
ても外 折第一此の如くも遠方へ出づる者
もの余が性愛極むる故に幸に之機を
得て萬延中乃年一たび力リホルニヤに
航海して濠洲文久元年ハ歐羅巴諸國
巡歴し今茲又ワシントンニエールクへ行

都令二度外國に旅行せしむるに際し、
 事或見ゆ一國に人情風俗も分りて
 心にとりて少くも依て松本者
 たり我日本國に近き道を外國人に親
 しく那里殊に去來に及ば外玉に勝るに
 けし處一もの官許に在り同たり、太平
 海のお脚船は出来ぬ、双方に交り居る
 べき兆しあり後日、人の外玉一法来す我
 事の必多るべし、や思ひぬれ、そ筆に引

乃幸免、お脚船に控極乗船の時、此得方、
 小の度見聞、一だけ、故書集又先年、
 羅巴一初き、と、書留、日記、その原書
 此中、おま、故書、一、の、意、お、取、集、一、冊、
 故書、是、故、西洋、故書、中、題、より、固、より、此、冊、
 子、々、外國、の、より、故、更、一、冊、より、人、の、より、故、
 くるものより、これ意味、ゆ、ければ、性、國、乃、
 書、故、讀、之、又、た、この、國、一、渡、り、物、事、に、
 明、故、人、の、より、故、見、る、より、故、より、一、冊、より

新之妻むらさき並なら比ひ等ら也
 今いま爲な世よ間かん下したに
 如ごとく夢ゆめの多おほく
 今いま母ははをを思おもふ
 人ひとはは新あらた

夢應三年丁卯月

福澤諭吉

西洋旅案內目錄

卷之上

世界の圖

總論

船賃拂方の事

爲替金の事

通用金相場ノ事

船中の模様

經緯度の事

世界中時候の事

印度海飛脚船の立寄る場所

上海

香港

サイゴン

シンガポール

ビナン

セイロン

アデン

スエス

アレキサンデリヤ

メシナ

マルセイユ

パリス

マルタ

ジブラルタル

サウスアンブトシ

ロンドン

卷之下

太平洋海飛脚船の立寄る場所

リンドサナ

サンフランシスコ

アカボルコ

附録

商法

パナマ

アスピニウラン

ニウヨーク

コンシユル 勤方の事

兩替屋の事

商賣船雇入の事

積荷請取状の事

商賣船賃入の事

荷物送状の事

賣捌勘定書の事

災難請合の事

生涯請合

火災請合

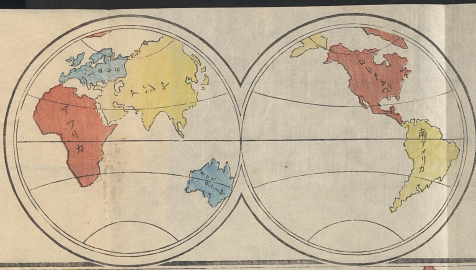
海上請合

目錄終

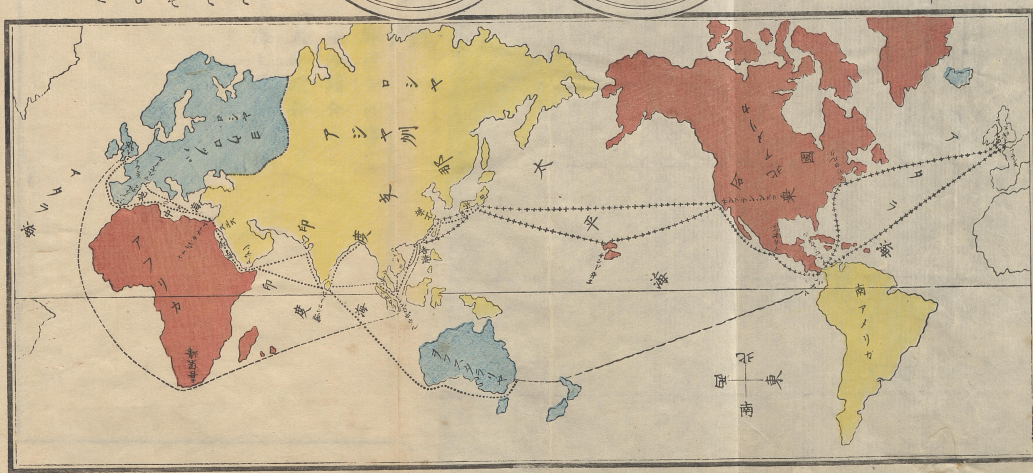
諸合を退る事
の北に上列の諸國
を觀望し臨み
世界中小島の諸島
此れを平らにせし
下列の諸國へなり



上段のまろき繪圖二つの内右の方と西半球といひ左の方と東半球といふ世界のまろき所と示したるものなり



下段の繪圖ハまろき地球を平ふひろげて世界中の船の往來する路筋を顯しきふものなり上段の繪圖と引合せ見ると



西洋旅案内卷の上

世界の形は圓くして球の如し故にこれを地球といふこの地球の中は海あり陸地あり陸地を五洲に分て五大州と名く第一亞細亞洲第二歐羅巴洲第三亞非利加洲第四亞非利加洲第五亞太利加洲と云なり亞細亞洲の中は日本支那印度等の諸國ありて金銀銅鉄材木絹糸錦茶砂糖其外天然の産物多し亞非利加洲太利も其國の産物は多きと云も國人の生れつき愚まて學問の道開けを道具

福澤諭吉 著

仕掛の目論見も出来を一口ふいはつたらぬ國柄あり世界第一學問の世話行届き人情おとなしく兵力強く禮儀正しくて國富み天然の産物ハ少々きとも人の工夫て物と造り陸小蒸氣車と用ひ海小蒸氣船に乗り何事も便利と盡文武とも盛れるを歐羅巴と亞米利加と限る殊に歐羅巴の中て英吉利佛蘭西日耳曼荷蘭を始と亞米利加ふては合衆國かり中て亞米利加と大國なるゆへたゞ亞米利加等いづれも出交易を勵と既支那日本とも條約を取結び且又印

度邊の島々を歐羅巴諸國の領分ある數千の商船東西往來し商賣日小繁昌するハ元來亞細亞洲に産物多きゆへて即亞細亞洲は世界第一の交易場と云ふなり日本も外國人のあつて西洋人といふを歐羅巴亞米利加の人々商賣の荷物を持渡さる西の方より來ふゆへなり然る所の通西洋人々東方の亞細亞洲と交易すは荷物は大抵帆船にて喜望峯を積廻ることなきも急用の品物を送り又商人と速き海路往來するは荷物船に乗てハ不都合なる小付き先年

英吉利佛蘭西の商人仲間と結び印度海定飛脚
 の蒸氣船數艘と作て其便利を達し支那日本と
 歐羅巴へは海上風雨小拘らる九六十日とて着
 夫より亞米利加へ十日余とて渡るべし尤飛脚
 船ハ數艘用意して途中度々乗替るべしとて先日
 本と出帆し其乗筋并ニ船と乗替る場所左の如し

横濱より

上海より

上海より

香港

香港より

シンガポール

シンガポールより

セイロン

五百五十里
 四百五十里
 七百五十里
 七百五十里

セイロンより

アデン

アデンより

スエス

スエスより

上陸し百里を如るの地續と蒸氣車

乗て一日小越

地中海へ出る所の港をアレ

キサンデリヤと

又船は乗り地中海

海を渡り佛蘭西の

マルセイユに着る又

ジブラルタルの

瀬戸を出て英吉利のサウスア

ンプトンへ着る

又亞米利加へ行くものは英吉

利のリーウルボタル

といふ港り又ハ佛蘭西の

バウルといふ所より

毎日出帆の飛脚船あるこ

とみちまゝ十日糸の船路にて亞米利加のニウヨ
ルクといへる所へ着て――尚くわゝきことは

繪圖を見ふべし
世の開け月進日新て諸國の產物次第
増一交易の道益繁昌する中ふも亞米利加の合
衆國は世に名高き大國にて商賣の繁昌するは英
吉利佛蘭西などの諸國より遙に勝るほどのみ
となふこのたび其國に商人等仲間を結び太平
海の定飛脚として大なる蒸氣船數艘と打建其内一
艘は去年の冬既成就して日本一も渡来し即余

来る船路并ニ船と乗替る場所左の如し

香港又ハ上海より 横濱 里數ハ前ニ記るせり

横濱より 横濱 二千五百里

サンフランシスコより パナマ 千五百里

パナマより ニウヨルク 千里

パナマは北亞米利加と南亞米利加との界ふて

の所へ上陸し二十里の地續と二時斗

ふて通越し亞米利加の東側なるアスピンワ

ルといへる所へ出て夫より又飛脚船ニ乗り亞

米利加合衆國の大都會ふるニウヨルクへ着る

ニウヨルクより歐羅巴諸國へ行くは矢張英

吉利佛蘭西と亞米利加へ渡るも同トあると

て日く出帆の飛脚船ふ乗り十日斗ふて英吉利

のリーウルポタルり又ハ佛蘭西のハルへ着

るべし

右の通りぬるたび太平洋海の飛脚船出來たる小付

てハ西洋諸國より亞細亞州へ往來する小船路の

日數ハ印度海の飛脚船と同トぬとて且印度海

は夏冬の差別なく暑氣甚しくて船中難渋なる

ゆへ此後西洋のく荷物ハ印度海より積廻ると

西津の船
も旅客だけは多分太平洋海の船にて渡来をべし
をまぎれしで外國人を見て西洋人と唱へた
やも今は東の方より来るゆへ東洋人といふも
理なきふありが實小昔日とハことゝわたり世
の有様なり
日本より外國へ渡るふハ印度海の飛脚船に乘る
も太平洋の飛脚船に乘るも其手續ハ同ト
て心得るべき箇条左の如し
船賃拂方の事
船賃ハ先方着までの船入用を前金ふ拂ふ取極
な

横濱住居の外國人ハ飛脚船の引請ありて
者ニ金と拂て便船の切手とイクトと請取り此切手
を本船ニ持参して船賃拂濟の證據となるなり
賃の直段は九左の如し
横濱より印度海の飛脚船に乘て佛蘭西のマル
セイユル又ハ英吉利のサウスアンプトンまで
行くふ

一番の客

七百二十ドル余

二番の客

五百ドル余

横濱より太平洋海の飛脚船に乘て亞米利加のニ

ウヨルクまで行く

四百三十ドル余

一番の客

三百十ドル余

横濱より亞米利加までの船賃は英吉利佛蘭西

までの船賃よりも余程下直なまとも亞米利加

の飛脚船ハ賄も粗末にて且酒の代は別の勘定

れるゆへ一兩方とも同じ割合なるべし

亞米利加と英吉利佛蘭西との間ハ船賃ハ九左

の如し

一番の客

百三十ドル余

二番の客

七十五ドル余

一番二番の外ハマチャレシ又々デッキンゼン

とて極下等ハ客ありては船賃ハ甚下直九百五十

ドルヲ半の入用にて歐羅巴まで行かる一サ

ンフランシスコへの船賃は五六十ドルナル

を運されども船中賄の粗末なすはいふまでもな

く寢床もあふなり其甚難渋なり

船中持越しの荷物印度海ハ飛脚船ハ一人前目方

三十六貫目限太平洋の飛脚船ハ同三十貫目限を

定とすめの定より目方張るときは九一貫目小舟

一ドル半斗の運賃と別段に拂ふことなり但
着替の風呂鋪包など携て船に乗るも其目方
と改るゝとれ若又莫太の荷物ありてこゝを積
荷し一て船底に積込先方へ達するも其運賃右
の割合より下直なり

為替金の事

横濱長崎箱館邊に専ら通用する洋銀ハメキシコ
ドルラルやて亜米利加合衆國の鄰國なるメキシ
コの通用金なり其相場々時々違ふまゝ大抵日
本にては一ドルラル小付三步位の通用なり日本

の通用金は外國にていまだ見ぬもの少く不
通用なるゆへ彼國へ行くときは其のメキシコド
ルラルと持越へて取違ふと大金なりては船より
積卸の取扱も不都合なり又こゝを飛脚船へ預切
りして先方着の上請取る仕法もあはれども百ドル
小付一ドルラル餘り預賃を取らふ右の次第に付
外國へ金子と持越すは其金と為替を賣し其
法色々あはれども此節専ら行なはて大夫大なる
は英吉利の爲替問屋といふバンクの手形を買ふめとな
る英吉利の都ロンドンに代不易と云ふべし

商人組合の爲替問屋幾軒もあつて世界中此諸國
 へ出張の店と設け既小横濱長崎も店と出して
 爲替商賣と爲りぬの店へ行て何程ふくも金と
 入る迄其高應時の相場を以て英吉利の通
 用ポントといへる金の手形と渡すぬの手形と以
 てロンドンの本店へ行けと正金と引替るを勿論
 此なども本店斗は限らぬづれの國へ持越ても
 右ロンドンの爲替問屋と取引をする兩替屋へ渡
 せば直小正金と引替又へ素人同士の賣買もな
 る由へたゞ一ば世界中通用の銀札なり其手形の

文言譬へば左の如し

光

一鐵ポント幾シリング幾ペンス也

右者何年何月何日何處を何素より請取

高付此等と手形とを出入上幾日之は同

本書之高付被取法但一二年之に取取金

渡申問答に仍如件

場所附

月

爲替問屋仲間姓名書判

ロンドンのユニオンバンク

右の文言小第一の手形と金子と引替りて第二
第三の手形へは金子と渡間敷云々であるは初め
手形を買ふとき同ト手形三枚渡りて一二三の印
をつけ即一印ニ金を渡せど二三印より渡さど二
印の渡さば一と三印に渡さどを記せり申へ速
方への手形と持越せど三枚の中一枚を留主
宅へ残し置次の飛脚船にて送るよふ一一枚ハ
自分懐中一枚を連の者へ預け置あどのめと
二とどきと途中小紙入を海小落し又は萬
一難船れど手形となくせるときも留主宅へ

残し置き手形を取寄て金を請取へ越向なり
但し金子と請取るときは當人の書判と手形の裏小
記し且手形の數三枚揃とさど然るべき請人を
頼むと彼是と渡方手重なるゆへにわくは三
枚とも間違ふよふ自分にて持参る方宜し
又手形の文言ニ手形と差出せし上幾日の後金子
可相渡とあるは前より通入る通りロンドン
の爲替問屋の手形おれど世界通用の銀札なり何
方よりも差支なく正金ニ引替る如きどもおれハ
相對のことにてよく本筋ニ行き正金と引替る

所ハロンドンノ為替問屋ナ不ゆへめ手形追々
 人の手を経て遂ニ右問屋に至り金と請取るべき
 手形を出して正金を請取るまでの間或ハ三日或
 ハ十日二月三月半年までも夫々の日限あり或ハ
 小初め手形を買ふときたとハ三月限の手形な
 ば其相場より三ヶ月限の手形ふれを相場や
 一ロンドンの本店にて直ニ金を出さずややく
 即手形の文言ハ何日の後とはめの日限といふ
 ぞさざども買ふときやま手形は相對ニ賣ると
 するもやまきゆへ日限の長短にて損徳はれまの

右の外為替の仕法ハ種々あるも其説話長々
 ばあの小冊子に記し難し
 通用金相場之事

一英吉利の通用ポントといへる金銭を二十ニ分
 する銀錢とシルリングといふ一シルリングを
 十二ふ合たる銅錢とペンズといふ一文の銅錢を
 とする彼國の言葉即一ポントは二百四十ペン
 ズなり
 一メキシコドルラルと云てポントの手形と買ふ

ふと固より時の相場次第にきざり大抵一ドル
 ラルも付五十二三ペンス即ち一ポント八九四
 ドル半に當るドルの相場と三步とを
 三バ一ポントは日本の通用金三兩壹歩二朱斗
 一亜米利加のドルはメキシコドルより
 も少し輕く大抵百ドルに付六十七ドル先
 の差あり
 佛蘭西の通用金はフランクといふ銀錢にて大
 抵五フランク半と一ドルと釣合ふ相場あり

以前のフランク二十枚に當る金錢あり十年斗
 以前の金錢の表に今の佛蘭西帝ナポ
 レオンの面の像あり四一に歐羅巴にきざり
 金錢は異名を附てナポレオンといひ一り即ち一
 ナポレオンは日本の二兩三步斗に當る
 西洋諸國もてはありメキシコドルと通用
 さざきや印度海の港并に上海香港邊を専らぬ
 のドルの取扱ふゆへ日本より外國へ渡る
 船中の小遣錢ハメキシコドルと正金小
 一持参すべし

船中の模様

西洋の船の大小といふはトンの数を以て計
ふ日本にて船の大きき積高の石數にて勘定する
と同様なりトンと名目の名よりトンは米六
石餘の重さ相當すトンの船といへば六
千石餘積の船なり飛脚船は大抵二千トニより四
五千トとまでの大船にて荷物も澤山積み旅客も
多し數乗の船中模様の太平洋の飛脚船も
印度海の飛脚船も大抵同一のやうな此度余輩
の乗りし太平洋の飛脚船コロラドの模様とあら

まゝ左の記をべし船の大きき三千七百トン長さ六
十間巾八間蒸氣の力も甚強く逆風あつて一昼夜二
百二三十里も走る船の兩側ニライフボウトとて
なつていらし十艘程ありこのなほほら底ニ
仕掛ありと云ふ水船なるふとも沈むべき船
よふよりたつものあるゆへに本船の難船をふ
めとあるときはこのライフボウトにてふた
ふたり其きりライフボウトの内より平生より
飲水パン并天文を測る道具を備置き何時あて
も不意の節をぬきふ乗移り飢渴の心配もれく道

具ふて天文と測さる何方ふとも自由に行ふなり
よふふしたるものなり又船中人数銘くの寢床
に浮袋の用意ありれ亦非常のたみふ備へりも
のなり○乗組の人数船將以下役く水夫頭小使
に至るまで百人餘ふて船中一切のめとと取扱ひ
旅客は千人斗も乗る席と上中下三段に分け上
の客は船の艫小部屋あり一部屋の廣さ凡四疊半
其片側へ中二人長さ六尺斗の寢床の棚と三段に
片まで三人相部屋なり但船中造作の模様自由
て二人寢の部屋もあり六人寢の部屋もあり又客

の多き少きも三人寢の部屋と別ふ寢床を附て五
人寢とさふめともあり○部屋はの寢床へ夜具の
用意は勿論朝夕のつらひ水手鉢うがい茶碗さ
ぼん手拭水こがし若びん船中酔ひさき吐く器
はぐも備へ部屋并ふ其外に掃除を小使の引請ま
て船中塵ひとつもねまふにやく行届なり毎朝
掃除終まば四半時めめろ船の役人并に醫師の立
合ふて船中の見廻あり○食事朝昼夕三度朝の
食事とブレイクフアスといひ昼とロUNCHといひ
夕とチニ子ルといふ朝ハ茶とのと食事の品も十

色斗登も同く一寸葡萄酒れやの格別の馳走
ふー夕の食事三度の内一番の馳走あて色く
品三四十種も取揃へ酒も澤山用ひゆるまて飲食
を馳走の品ハ三度とも肉類魚類飯パン食後ふを
蒸菓子水菓子總て料理ハ日本よりも餘程丁寧
に但日本より平生肉食小馴さざる人を船に乗
るとき漬物醬油其外の食物少く半用意をべし外
國風の食物のこゝてはをどり二三十日の間困る
そのなり○食事の間ハ巾三尺斗の長臺幾個
ありて其上ニ馳走の品物并ニ銘々の皿茶碗と

ならべぬの臺をテイブルといふ食事をする者ハ
十人も二十人も椅子小腰と掛てゐとつテイブル
の周圍ニ寄集り寄合膳をて食事をする姿あり○上
の客病氣の節自分の部屋へ食物を取寄るは勿論
又も自由茶をゆひの付るとも勝手次第で連と
も部屋の内お煙草ハ禁制なり都て船中ハ火の元
嚴重うて火消の道具も十分用意し時々不意に
鐘と鳴りて火事の訓練をするところあり○中の客
ハ艫の下段ハ部屋なり部屋向も艫末食事の上
の客と一處ふするのとれらる其外の取扱上の客

とる差別あることも格別見苦しいものである。○下
の客は船の舳の方へて水夫れど、打交り寢床も
あふらな食物の粗末ふは勿論はうい水と
も自由である位な極下輩の者ならで其難
洪く堪はる。○船はもとより乗合のめとな
る世界中諸國の旅客打交り親子連もあらず夫婦連
もあらず老人も有り子供もあり或ハ酒を飲下話と
歌ハ或ハ茶と飲て理屈をいひ或ハ書と讀ミ或ハ
牌子とと里或ハ田舎者が在處の自慢と一或ハ下
手將基をまけて腹を立笑ふ者あり泣くも此所を

愚弄する者あり嫵たる者有り其有様ハ日本
の乗合船ニ少しも替るものと雖一但西洋にてハ
婦人と丁寧な取扱ひ都て行儀正しく風俗好む
一初て船に乗る人などよく其めと心得婦人
一向て失禮とせはるる勿論男子同士もてもあま
り慢ぶる一話と云へらるる人の見處をて
一とたとぬ赤豆と出婦人の前まで烟草をの
ひれどハ甚だ失禮のめとせり謹むべしこのめ
とる船中斗ニ限らる彼國一体ハ風俗な多ゆ一上
陸の後も忘るべからず○船中の便所ハ左右二十

所づゝもありて上の客と中の客とは區別あり又
船の方へも下の客并水夫ども此便所數ヶ所あり
都て便所を船中役人の立合ひて毎朝掃除し誠
小奇麗なり彼國の大便所を家の内にあるものを
船中にあるものも其模様少くも替らる一段高き
所は圓穴ありて穴小腰と据る趣工なり然
るに初て外國へ行くと其めと心得て
日本流にすると便所と汚しをならず外國人々笑
とまで面目次第もあるとありよふつくしむ
る

經緯度の事

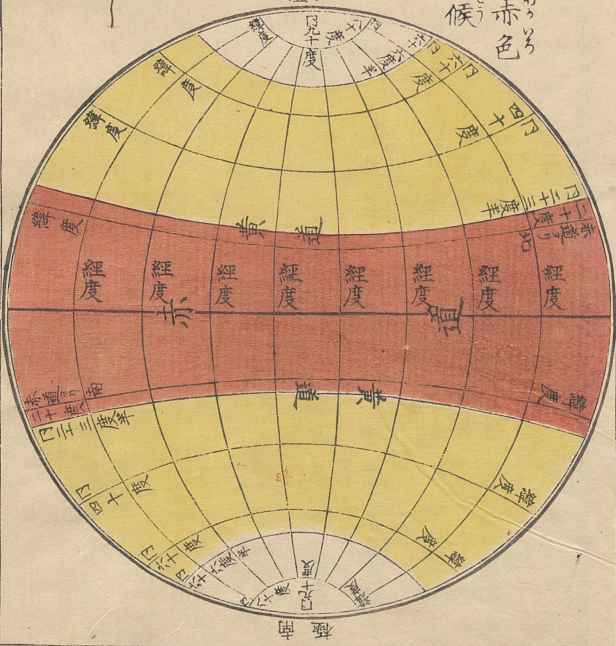
陸地小人の住居する處なきを此處より彼處まで
幾町此山より彼山まで幾里と定りたるものとあ
るも廣き大洋までハ渡海中十日も二十日も山も
見ず陸も見ず目當と矢べきもの如ふや一西洋の
航海者其天文を測て方角を定めいふある大洋も
ても少くも間違ひ其方角を定る仕方地球の
北の端と北極といふ南の端と南極といふ北極と
南極との間はんをか此所より西より東へ一筋を引
てこれを赤道といふ赤道とまんをなすや一こま

北極小至るまでと南極に至るまでと兩方とも
九十づつに分て赤道の通り西東の筋を引き兩方
合て百八十と成るは是と南北の緯度といふ初前
にもいひ通り世界の形を圓きものゆへ右の
如く西より東へ一直筋を引けば其筋の圓き地
球を取廻りたる輪の形をなして地球の表側
より北極より南極まで百八十度あるを裏側より
同じく百八十度ある兩面合て三百六十度なり
度を英吉利の六十里あるゆへ世界の周圍は六十
里と三百六十合せざる數ふて二万四千六百里なり

又英吉利のグリニウ井ツナといふ所の天文
臺と本より北極より南極まで真直筋を引き
の筋は西より東へ一段より六十里隔て同一
より北極より南極へ筋を引き地球の周圍を三
百六十に分けあると東西の經度といふ右の如く
世界の周圍を東西南北十文字に分け一度を六十
里と定め渡海するとき天文と見て方角を測る地
方の見へぬ大洋ふても船の居處ハ寸分も違ふ
やなりこれ航海者の測量といふはと一は大洋
ふて船の居處北緯三十四度東經百三十七度とい

へバ赤道より北の方三十四度即ち二十四里英
 吉利の天文臺より東の方百三十七度即ち八十二
 百二十里の處に船の居るといふと小て日本は
 遠州洋に當る但し英吉利の一里を日本の十六町
 五十七間と當る其百里は日本の四十七里余あり
 飛脚船は渡海中に毎日測量して經度緯度の數と
 一昼夜走るる里數を紙に記して船中より張出す
 四一其度數を見れば世界の圖に引合をきき素人小
 ても船の乗筋をみる處に左の繪圖は經緯度の大
 略と記すものなり

繪圖の中赤色
 の所は時候
 のあつた黄
 色の所は
 時候は
 南北兩端
 の白き所
 は時候寒し



世界中時候の事

都て時侯ハ土地の模様ニ由て色く小差あれども
一躰ニ世界中の時侯のものとといへる其大略左の
如く赤道と真中と此より北の方へ二十三度半
南の方へ二十三度半合て四十七度の間と熱氣の
方角といひ時侯甚だ熱く此邊の地方ハ草木よ
く生長大木銘木珍しく禽獸多し紫檀黒檀れど
いへば材木并に獅子虎象の類も盡くこの暖地よ
出来るものなり其外菓實も椰子芭蕉の實麥米
もよく登るゆへ先年より外國の人象虎など

持来て見世物おしなするもあれども西洋の本
國より持来きぬるものありて印度又ハ中亞米利
邊の暖地にて買ひしものなる且又近來ハ南京米と
て多く米と持渡さども此亦らふ南京の米を
かりてあらず暹羅安南其外の熱國より出来しを
外國より買取て日本へ輸入するもの多し初めの
如く赤道より南北二十三度半づつ此所より界を立
て其界と赤道といふ又此赤道より南と北の方へ
兩方とも四十三度づつの間と平和の方角をひ
此邊は春夏秋冬の差別ありて禽獸草木五穀菓實

程よく出来人の住居する所なり日本支
 那西洋諸國ハ皆此方角ありふ一時候ハ大抵同
 平和の方角の内より國れども余程北の方小
 方六十度の所ニ當る位の場所柄四一なり其外
 歐羅巴の諸國も日本小較遠き少北の方小あり
 ゆへ矢張り日本より少一寒一平和の方角と外
 ても北極と南極とに至るまで二十三度半
 づの所と寒氣の方角といひ草木禽獸少く人も

住はる程寒き地なり右の如く赤道より南北二
 十三度半度の間を時候熱く夫より又南北四十
 三度づの間の時候程克夫より又南北二十三度
 半づ、北極と南極とに至るまでの間、時候寒し
 外國へ旅行するや衣類と用意を不ふもあり
 時候の様子を心得おまは甚た不都合なり又世
 間のく動をきき外國へ行きて人ニ彼國の時候
 如何哉と尋ねる者多きも右ニ述る理
 合と知る言葉を費さずして自分ニ分るべし
 又前の繪圖ニ引合せ見れば

印度海飛脚船の立寄場所

日本より印度海を渡り西洋諸國へ行く小佛蘭西のマルセイユより道程九四十七百里余英吉利のサウスアンプトンまで同く五百四十里余途中船に乗替又ハ石炭を積込た立寄場所の模様左の如く先横濱より上海まで五百里五日路なり上海ハ支那の南京と距る六十里餘揚子江といふ大河の口にある港小て人の數二十萬人西洋諸國の商賣船并ニ支那の小船も出入り繁華なる場所なり其土地の産物絹布象牙の細工物等又

市中の外ニ茶園ありて夥しく茶を製して外國へ賣出さ○市中ニ城構あり建安城といふ支那人の専ら此の構の内に住居外國人の家ハ構外小あり此城ハ古代三國のとき呉の孫權が繩張せし城とて名高き古跡なり近來支那の政事不行届ふて英吉利佛蘭西ハ警衛を頼み城中ハ外國の旗印と建り○氣候大抵日本と同一なりなまども濕地にて水ありく飲水に困るコレを傳染病の流行をなすと云ふ死人多き由なり上海と出帆して香港まで四百里船路四日小て着

香港ハ支那の南東の方小島を長五里中三
里岩山のミよて草木少く平地なり支那の領
地なり天保十三年英吉利との合戦ハ支那の
人敗背て和睦のとき此の島を英吉利へ與て
より永代英吉利の領分となし其後追々英吉利
人の家と建交易場を開き近來々尚又寺と建立
學問所を設け人の數も次第増して繁昌の港と
なり此合戦の發端ハ英吉利の商人兼て阿片烟
草と支那小賣込支那の人も頗小この烟草を好こ

追々小其賣買大造となり一縣阿片烟草ハ人
の毒にもなり此を用品を無益小金と費して國
此不為になるゆ一支那の役人の賣買を差留ん
とをまじも英吉利の商人も此を聞入を内て
品物と持渡支那の人もこの毒烟草をのむのと
の癖ふありて矢張これを買ひ内證ふて互ニ商賣
一居たると役人の内ニ林則徐などいへる人あり
て大ニ此を立腹一英吉利人の持渡を阿片烟
草と理不盡ニ取押て此を燒棄一所英吉利の政
府もて立腹一事の理非を談判もちかへて我國

人の荷物を焼棄とは相濟ざるものなりて本
國より軍勢と支那へ差向散く小撃をくたて遂に
支那より和睦を願ふといふことより廣東厦門
福州寧波上海の港五ヶ所を開き償金ハ左の通
約東より

一 六百萬ドルラル

是ハ支那の役人の燒棄たる阿片烟草代金
の高

一 三百萬ドルラル

是ハ廣東の商人より兼て英吉利人へ商賣

の事ニ付列員となりて分を支那の政府より
償ふ高

一 千二百萬ドルラル

是ハわがたに英吉利より軍勢と差向をる

ニ付其入用として支那の政府より拂と

むる高

右合て二千一百萬ドルラルの高と三ヶ年賦ふ

定めも其拂方延引をるとすは一ヶ年五分の

利息と取るべしを約定せり

斯く五ヶ所の港を開き二千一百萬ドルラルの償

金と拂ひ外ニ香港の地を永代英吉利の領分小
そ一との掛合て和睦の談判始て調ひたり頃
ハ西洋の十八百四十二年支那れ道光二十二年日
本の天保十三年小當り今より二十六年前のこと
なり其後萬延元年申天津といふ所ふて英吉利の
軍艦と間違のこ出来遂に又合戦となり支那の
人敗北八百萬金の償金と英吉利の方へ拂ひ廣
東の地方小あり九龍といへる地面と英吉利の領
分となりり○香港の時候ハあつて寒中よても
日本の三四月頃の如くあまきとる次第小南の方へ

向ひ印度海小出紅海に入るまでハ始終熱氣の方
角と渡海するゆへ衣類其外夏の支度と大層但
印度海の暑さよて日本の暑中よりも嚴きりと
ハあなまきとも夜昼ともに同一暑さあて日本ニ居
るときは如く朝夕夜中の冷氣は休息をふことの
出来ざるゆへ小格別難渋なり
香港よりシンガポウルまで七百七十里路あり但
佛蘭西の飛脚船を走らせ此間小交通のサイゴン
といふ港小寄り石炭など積込むこの地ハ元安南
の領分なり一六七十年前佛蘭西は攻取らる當時

西海

を佛蘭西のものとあり軍艦商船も出入り追々繁
昌に赴き土地の産物はいち多し
シンガポウルを英吉利領の島なり赤道を南北の
方二度の所ありて時候甚だあつ四季の差別
れくいつも夏の通よりて日本の寒中よりもの
地より胡椒椰子西瓜の類澤山あり又此邊の島に
ハ丁子胡椒生姜椰子芭蕉パイナップルなどい
る菓實ありパイナップルを草の實あり形は松子に
似て大なり味甚だよい芭蕉も日本よりて實と見
えどもあつた芭蕉はいち夥しく實を結て水菓

子小用ゆ味殊に甘く日本の甜瓜に似たりあの外
蜜柑橙實等何品もより安澤山よりて價もやそ
○此島は虎多く折く人々を害となり其外禽獸
は野猪山猫大蛇鸚鵡猿の種類多し飛脚船入津
をさる土地の人猿鸚鵡など賣物を持ち来り可愛
らしく見まども日本へ持歸えバ時候寒いて生育
難し○シンガポウルの人々數九六萬人此内半分
ハ支那の人よりて本國より渡世し出てもあつた此
外印度海并ニ太平洋の島々サンフランシスコあ
どにも支那の人の住居を居る者多し然る所其者共

西海

西
外
國
人
へ
交
る
小
支
那
の
言
葉
ハ
不
通
用
な
る
ゆ
一
英
吉
利
の
言
葉
を
用
也
世
間
の
様
子
を
知
る
人
ハ
支
那
の
文
字
ハ
廣
く
通
用
さ
る
よ
小
思
ふ
者
も
あ
る
ど
も
心
得
違
り
凡
世
界
中
ニ
交
易
の
行
と
る
港
ハ
英
吉
利
の
言
葉
の
通
用
せ
る
所
ナ
一
又
西
洋
の
内
地
ハ
入
て
る
佛
蘭
西
の
言
葉
と
貴
は
る
國
ナ
一
ゆ
一
ハ
當
時
外
國
人
ハ
交
互
外
國
の
換
據
を
知
ら
ん
ハ
是
非
と
も
英
佛
の
言
葉
と
學
ぶ
べ
う
ナ
シ
ン
ガ
ボ
ウ
ル
を
出
帆
一
テ
マ
ラ
カ
の
瀬
戸
ハ
入
右
マ
レ
ヤ
の
地
方
を
見
左
小
ス
モ
タ
ラ
の
島
を
詠
て
次
第

小
北
西
向
の
印
度
海
ハ
出
セ
イ
ロ
と
い
ハ
る
嶋
の
内
ハ
あ
る
ボ
イ
エ
ト
デ
ゴ
ウ
ル
を
不
港
ハ
着
る
レ
ハ
ボ
ウ
ル
ヨ
リ
モ
セ
イ
ロ
と
す
で
海
上
七
百
五
十
里
八
日
路
ナ
リ
但
一
英
吉
利
の
飛
脚
船
以
て
途
中
ヨ
リ
ピ
ナ
ツ
ヨ
ハ
小
島
ヲ
寄
て
石
炭
を
積
む
ピ
ナ
ツ
ハ
マ
カ
の
瀬
戸
の
中
ヲ
て
右
手
ヨ
リ
あ
る
此
嶋
ハ
英
吉
利
の
領
分
ナ
る
土
地
産
物
の
換
據
を
略
レ
シ
カ
ボ
ウ
ル
ハ
同
ト
セ
イ
ロ
ン
ハ
往
古
葡
萄
牙
の
領
分
ナ
リ
一
ハ
一
度
荷
蘭
ハ
取
ら
る
其
後
又
英
吉
利
の
領
分
と
レ
シ
馬
の
周
圍

澤放葉内

三百里斗港數ヶ所あり飛脚船の入津する港とボ
イートデゴウルやいふ時候ハ略シンガボウルと
同様より暑一産物も同く椰子密相胡椒の類多
一殊小挂枝は名の嶋第一番の名産にて諸國へ積
出をゆへ一名挂枝島ともいふ山にハ象多し或
ハこれを馴して牛馬の如くつらふ者あり就てハ
象牙も澤山なり色く細工を賣物なり○セ
イロハ暖地より一年二度の米作あり即ち七
月より十月までの間ニ殖はり米を翌年の正月
より三月までの間ニ取收め三月より五月までハ

間山種と下したるもの八月より十月までハ間
る登るさまども其米を外國へ積出共程澤山を
出来を却て他國の米を用ひとあり○セイロン
嶋は釋迦如来誕生の地より島のく皆佛法を歸依
せし爲の中ハアダムが峰とて高き山なり高き千
二百間余島人の物語に釋迦如来の山小籠て法
を説き遂に其頂より天上に登り今に至る處で其
足跡ありといふ
セイロンよりアデムまで九千里船路九日にて達
す

アデンも英吉利の領分なり紅海の入口あり時
 候はシムガボウルセイロン此よりもあり土
 地柄より一から草木少く人の數一萬余人商賣
 繁昌せや唯飛脚船おとへ石炭と積込む用意をな
 そこのさきまどもこの邊を渡海す船をセイロン
 を出帆してより外に立寄るべき港なき由へ何ま
 せぬく碇泊をばるそのなり
 アデンを出帆して紅海へ入右の方にはアラビヤ
 の地方あり左の方を寄進する亞非利加州を見
 ち亞細亞州と亞非利加州との界なき一昧この海

ハシムガボウルセイロンなどより北の方あり
 る割合めてやく冷しきとづれまども亞非利加州
 并にアラビヤの地方も幾百里となく廣く砂原あ
 りて炎天日照され其焼砂より熱き風を吹送る由
 へ昼夜とも暑氣小堪難く日本より歐羅巴一行く
 途中一番苦しい場所なり
 アデンよりスエズまで六百里余海上六日ほど着
 長

スエズをエジプトの南岸の港なり此邊の地方ハ
 もと土耳其の領分なり一がどもエジプトの城下

カイロといふ所はパシヤとて城代の如き者あり
て自由なるこの邊を支配し今よりハ土耳其格と別の
國のよふおかしきなり○スエスの港を遠淺にて本船
ハ沖ニ錨を卸し小艇にて上陸を○スエスよりア
レキナンデリヤまで地續百二十里斗蒸氣車より
一日ハ通越ニカイロといふ城下ハ其途中ニあ
る古き土地にて名所旧跡多シマホムト宗の寺
あり洪大なる構あり又カイロより三里斗の處ニ
ラミドとて目と驚をほど大なる石塔二あり高さ
四十丈中六十丈石垣のよふ築立をふものなり

の石塔ハ九四十年前セオスといふ國王の
墓印といふ世界中ニ名高き旧跡にて秦の始皇が
築し萬里の長城も劣らぬほどの大仕事なり○
の邊ハ四季ともに雨多し少なき熱國なほ
ども夜露多く且タイルといふ大河ありて其潤
み草木よく生長す土地の産物ハ綿コヒの類
なり○人氣ハ甚だよりうらや旅人通行のとき
用心すべし

アレキサンデリヤはエジプトの北岸にある港
て地中海に臨み亞細亞州と歐羅巴州と

亞非利加州と三國の間あるゆへ地中海と名け
たるなり○アレキサンデリヤも實ハ土耳其の領
分ふれども今ハエジプトの支配ふりてカイロ
の別城下なりその港より佛蘭西の飛脚船に乗
バイタリイとシマリとの間ハ狹き瀬戸を通り其
瀬戸口もあるメシナといへる港に立寄て一時斗
船掛し直不出帆して佛蘭西のマルセイルへ赴く
アレキサンデリヤよりマルセイルまで海上七百
里七日路なり
マルセイルを佛蘭西領の南手ふりて地中海諸港

の内一番大なる場所にて諸國の商賣船日々出入
大船千二百艘も船掛をせしほど廣き港あり諸
方一飛脚船も往来し交易の繁昌をみと一ふた
ねらな産物も石鹼香具其外製藥類煙草甘き酒履
帽子等○土地の人数三十萬人余時候ハ大抵日本
と同じ○飛脚船の旅客上陸をせざる先宿屋へ一宿
そこねり佛蘭西の都パリまで路程凡二百里
余蒸氣車にて一昼夜に達す途中小りオレと
いふ繁華なる所あり土地の人専ら絹布羅紗の類
を織る世界に名高き織物の場所なり日本より佛

蘭西へ積出を絹糸も多分ありオニへ行々様子あり
 又アレキサンデリヤより英吉利の飛脚船ニ乗
 るバ佛蘭西の飛脚船とハ乗筋違ひ先同處と出帆
 一アルタ嶋に立寄ジブラルタルの瀬戸を出て英
 吉利のサウスアンプトンへ着るものとあり道程
 ハアレキサンデリヤよりジブラルタルまで八百
 五十里同處よりサウスアンプトンまで五百五十
 里合て千四百里十二三日の渡海なり
 アルタ島ハ地中海の中程ニある小嶋あり元佛蘭

西の支配なり一六七十年前より英吉利の領分
 となり土地柄ハよりより英吉利より大造ニ臺場
 中海要害の場所あるゆへ英吉利より大造ニ臺場
 を築き用心堅固當時マルタの臺場とて世界中
 有名高き程なり○此の邊の産物ハ珊瑚珠海綿
 の類多しニナ并ハマルタ嶋へ着るを珊瑚の
 玉と珠數のよふにつなぎ又ハ花形此とハ刺を
 を賣物ニ持来り價ハやを々々とも品物を下品な
 り但一上品ハ英吉利佛蘭西の商人等兼て數金と
 して其本國へ引上るゆへこの邊に賣買ふは此を

様子なり

ジブラルタルも英吉利の領分なり地中海の入口
にて臺場の堅固なる世界第一番といふべ
き構れど海岸の岩山を切て砲門を開き大砲千挺
余も据付あり英吉利人の地中海へて威光を耀
りて此臺場とマルタ島の臺場とて要害の地
と古き所なり由てのめとて諸國の人くはを恐
るものなり○ジブラルタルの瀬戸の南岸ハ亞
非利加の地方にて北岸と即ち右の臺場あり兩方
の間狭き所にて六七里なり此瀬戸は不思議な

るものと潮の流なり地中海ハ此瀬戸の一方口
にて袋の如くななり瀬戸の外より始終潮の流
て内より外へ流出をなすことなりされども古來地
中海ハ水の溢れことも聞き西洋人の説は斯く毎
日毎夜流込む水は地中海の暖氣にて湯氣の如くな
るて空中ニ消失且地の底に道ありて人の目に見
ざる所より外へ流出するなりと右の次第は付
地中海は右何處の海岸にて満潮も干潮も大抵
同一水の高さにて土地の人潮時といふめと知
らる

サウスアンブトン英吉利の都ロンドンの西南
の方三十里斗の所ある名高き港なり諸國の
出入りて交易商賣盛れるいふ論殊ふ此港ハ世
界中往來する飛脚船と仕出又外國より飛脚
船の入津する此港形は四一貴賤貧富の旅人一
年の間出入すること幾萬人なるを知らず土地
の繁昌いふ斗もなり○此港ハ船の修覆場數所
あり洪大なる構あり見物なす其外學門所も盛
なり世々名高き蒸氣機關と云ふたをトとい
へ大先生も當地にて生きたる人なり○サウス

アンブトンよりロンドンへハ蒸氣車より一時の
間通行なす
右の手續ハ佛蘭西の飛脚船に乗る佛蘭西の
都パリスへ着英吉利の飛脚船に乗る英吉利
の都ロンドンへ着を履一既ハパリスロンドンへ
着それハ兩都の間百二十里蒸氣車と蒸氣船と
乘て僅一日路なり先パリスよりロンドンへ行
くハ佛蘭西領の北れるカレーといふ所へ出夫
より十里余の瀬戸を渡り英吉利領のドラウルと
いふ港へ着一直ニロンドンへ達す一其外歐羅巴

諸國へ蒸氣車此路縦横小互り旅行するもて
杖笠草鞋の用意小も及ぶ其儘車に乗て百里や二
百里の道を一夜の間にも行けるべきめくも遠
歐羅巴州の内にて遠國へ旅行すめいふども
實ハ江戸より近在まで歩行するほどの苦勞もな
し○歐羅巴へ著の上宿屋の模様ハ上中下色々小
あま上の旅籠おれ一日の賄一人ニ付二三兩下
の旅籠なまば一日あ一步斗ふふなり又大勢ふ
て長逗留とそまゝい貸坐敷を借る手願ふするも
し先宿屋に着るまで店の帳場へ行て名前を記

一部屋の鍵と請取其部屋一案内させて荷物如ど
も部屋へ入て一先落附き其後出入の節ハうなら
る部屋は戸小錠とありそ一一大勢人の出入する
宿屋小盗賊も多し油断スべうらに宿屋の部屋
はい一々番附あり大なる宿屋はい部屋の数れ五
六百もあり部屋は居て宿の者へ用事あるときは
部屋より勝手へ通る針金の糸代引き鈴を鳴ら
し人と呼ぶなり食事す部屋は取寄てもよし又
食事の間ニ出て大勢と一處へてまゝ○但し
食事を部屋小引けバ旅籠の代少し増さべし○外

出るゝ馬車といふものあり英吉利の言葉
カリエイジといふ二人乗四人乗の車を馬に引
せ日本もさき駕籠の代ふれどもおれども駕籠
も乗るゝとてや矢張江戸の駕籠屋と
同トことふて車屋へいひ付て雇ふこともあり
駕籠の様な途中にて乗るゝものなり馬車の賃
道の速近にて取極又ハ一時何程と取極るゝ
もあり大抵一日借切にて乗るゝ一人前の車賃三
四兩なるべし又オミ子ブスとて乗合の馬車あり
その車はたとへば筋違見附より日本橋までと

日本橋より京橋までと道筋を極て一日ふ幾度
も同ト道と往來するもおれめて人数二三十人も乗
るゝ大車なり乗合の人を日本橋より乗て京橋
まで行く者もあり又ハ錦々行々先の方角より由て
途中より乗り途中より下る者もあり但し賃金を
其道筋を半分乗るゝも皆乗るゝも同一ものとせられやも
一軒ふ此車の賃金ハ甚だやそ市中へ通の多
通筋にハぬの車幾挺も往來するゝ市中之道筋
をよく心得て此通より彼通へと順ふ飛乗とぞ
まが僅斗の賃金にて終日車に乗るゝべし

西洋諸國

右の西洋諸國の風俗模倣を事明細小説といふ
其事柄多くてその小冊子も盡るを余もあらず
是れこれと略し下の巻も又太平海の飛脚船
て西洋へ行々途中の模倣をあらす記すべし但
西洋諸國の政事向年貢は取立方其外文學兵制
等のみとを去年余も著したる西洋事情といへる
書小其大略と記せり就て見ゆべし

西洋諸案内卷の上終



